

編集者 序

超実践マニュアルシリーズは画像診断を構成する各モダリティ領域や臓器別に発刊され、多くの読者にご愛読いただいている。核医学領域においては2006年にシリーズ第3弾として『超実践マニュアル RI』を刊行して、核医学検査にこれから従事する方やローテーション勤務で携わられている診療放射線技師の皆さんから多くのご支持いただけてきた。

この度、『超実践マニュアル RI』の発刊10年を機に改訂が計画され、掲載内容の見直しがなされた。当初は、新たに登場した装置や放射性医薬品を加筆するだけの予定であった。しかし、改訂内容を吟味していくなかで、核医学検査による画像診断の役割や医療安全に関する考え方など、この10年で大きく変化した事柄も多く、一から内容を見直すこととなった。その結果、内容の一部改訂ではなく、新たに『超実践マニュアル 核医学』として発刊するに至った。

本書『超実践マニュアル 核医学』の執筆は、前書から継続となった執筆者と前執筆者より推薦され交代となった新規の執筆者が協同して行った。いずれの章も、それぞれの分野における十分な知識はもちろん、臨床現場におけるローテータへのサポートについて豊富な経験と情熱も併せ持つ中堅、ベテランの先生方に執筆をお願いすることができた。

核医学は、機器、医薬品、撮像技術および読影の4つの分野に大別され、前書の「編著者 序」ではそれぞれの分野が自動車の四輪として例えられていたが、いまやその搭乗者は以前のような専門医や専門技師だけでなく、ローテーション勤務の方々を中心となってハンドリングしている施設も多くなってきている。そのため、核医学の新たな道を安全かつ楽しみながら進む

ためには、便利なナビゲーションが必要となってくる。『超実践マニュアル核医学』では、複雑な機能を有するナビゲーションシステムではなく、本当に必要な情報を厳選し収載することで読者のナビゲーションとして、実践的に役立つことを目標としている。そのため、これまで前書で培った基本的なコンセプトを継承しつつ、新たにSPECT/CT、半導体装置、RI内用療法などの情報をできるだけシンプルに盛り込んだ。また、このモデルチェンジを機に、病院実習や大学院教育においても参考にしてもらえるように、Q&Aや巻末の付録を整備した。

将来、一冊の『超実践マニュアル 核医学』が各ご施設の核医学検査室にあり、必要な時に手にとって、患者のために活用してもらえようならば、編著者として大変光栄である。また、本書がローテータの方々にとって、核医学に興味を持っていただけるきっかけになるようならばさらに幸いである。

最後に『超実践マニュアル 核医学』の発刊に際し、VERSUS研究会はじめ関係者の皆様から有用なアドバイスをいただいたことに対しお礼を申し上げます。また、編集作業における医療科学社の齋藤聖之氏のご尽力に深く感謝申し上げます。

2016年4月吉日

茨城県立医療大学 対間 博之

千葉大学医学部附属病院 飯森 隆志

川崎医科大学附属病院 甲谷 理温